

ディーセント・ワークをめざして  
ーベルギーで考えるー

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：ベルギーには、何をするために行ったのですか。

A：(林明夫。以下略)欧州委員会(EC)が主催したエンプロイメント・ウィーク・2005(Employment Week 2005)という、EUでは最大といわれる雇用に関する国際会議に参加するためです。4月12日から14日にかけて、ベルギーの首都でEUの本部があるブラッセルの中心にあるピラミッドと呼ばれる国際展示場と隣りのシェラトンホテルで開催されました。約1000名の参加がありましたが、日本を含むアジアからの参加は私一人で、使用言語は英語でした。

Q：日本人の林さんが、なぜヨーロッパの雇用に関する会議に参加したのですか。

A：ヨーロッパは、1980年代から1990年代にかけて10～20%台という高い失業率に苦しみ抜きました。失業は、人間の尊厳をも奪うとさえ言われました。そのヨーロッパが、EUの統合、とりわけ通貨統合に併せて失業率をジリジリと下げ続け、ユーロ地域では今年の8月で8.6%にまで至りました。10年前には23%以上の失業率に苦しんだスペインでさえ、この8月で9.4%にまで下げてきました。どのような努力の結果がEU全体の失業率を下げたのかを知ることは、失業率の上昇に悩み始めた日本にとっても参考になるのではないかと思います。

Q：EU全体の失業率を下げた取り組みとは何ですか。

A：1999年1月の通貨統合に向け、各国が真剣に取り組んだ知識社会に対応できるだけの労働生産性の向上の取り組みが第1で、2000年3月からの「リスボン戦略」達成の取り組みが第2と私は考えます。

Q：「リスボン戦略」とは、何ですか。

A：ポルトガルの首都リスボンで2000年3月に開催された欧州理事会(首脳会議)で、2010年までの10年間に達成しようと立てた戦略です。EU全体の戦略目標として、「より多い雇用とより強い社会的連帯を確保しつつ、持続的な経済発展を達成し得る、世界で最も競争力があり、かつ力強い知識経済になること」を掲げました。欧州委員会は、EU全体の失業率を4%にまで下げることも提案しました。

私は2000年11月にもこのエンプロイメント・ウィークに参加しましたが、どうすれば「リスボン戦略」が2010年までに達成できるかが熱心に話し合われているのを見て、胸が熱くなった覚

えがあります。「リスボン宣言」から5年経った今年は、これからの5年間で何ができるかが話し合われました。

**Q：失業率を下げるためにはどうしたらよいと、EUでは考えているのですか。**

A：欧州統合と、知識社会に対応できるだけの「雇われる能力(employability エンプロイアビリティ)」、つまり欧州の共通言語である「英語」によるコミュニケーション能力と知識社会に不可欠なIT能力を徹底的に身に付けた上で、専門性を高め「労働生産性」を向上させる。最終的には、一人当たりのGDPを上げることが大事と考えているようです。

各国政府と大学などの高等教育機関と労働組合の三者が心をつにし、質の高い仕事ができる人々を増やそうという目的で、様々なプログラムを共同開発しています。年齢、出身、性別を問わずに「ディーセント」な仕事、つまり「ディーセント・ワーク」に就くことを最終目的にしているように思えました。

**Q：「ディーセント・ワーク」に就くとは、どういうことですか。**

A：国の状況によって異なるでしょうが、日本ならば、生活できるだけの収入を得ながら自己実現できる仕事に就くことだと私は考えます。

**Q：学習塾や予備校、私立学校の経営者が考えるべきことは、何ですか。**

A：そこで学ぶ人々を「ディーセント・ワーク」に就かせるために最低限必要な基礎知識や躰(しつけ)を身に付けさせることであると私は考えます。母国語である日本語や世界の共通語である英語で読み・書き・聴き取り・話す能力は、これからの「ディーセント・ワーク」には不可欠です。コンピュータを使いこなせることも欠かせません。さらに言えば、日本語と英語、コンピュータを自由に使いこなせた上で、専門性をもつことが、これからの働き手には求められます。

また、自己責任で生きることができただけの基本的な生活習慣が身に付いていることも大切です。更には、「美しい立居振る舞い」「敬語表現を含む言葉遣い」を内容とする「躰(しつけ)」が身に付いていることも欠かせません。

我々、学習塾、予備校、私立学校の経営者は、文字通り真剣になって、現代の日本人に最も欠けるこれらの人間としての基本的な能力を教え身に付けさせるべく、スタッフと手を携えて協力することが肝要です。

**Q：最後に一言どうぞ。**

A：勉強は何のためにするのかをEUの取り組みを参考にしながら積極的に訴えるのも我々の「使命(ミッション)」かもしれません。そのときの説得力ある考え方が、この「ディーセント・ワーク」であると私は思います。学習の動機付けを模索なさっている先生も多いと思いますので、是非、この「ディーセント・ワーク」の意味をお考え頂き、子どもたちにお伝え頂ければ幸いです。

－ 2005年10月12日に記す－